

テーマ設定の理由：様々な虫や植物等、日々自然に触れる中で、「これは何？」「どうして？」「先生、みてみて」と疑問を感じたり興味・関心をもって遊んだりする姿が見られる。子どもたちが身近な自然との出会いに心を動かし、虫や植物の生態や特性等についての興味・関心をより一層深めるため

活動Ⅰ：成虫になれなかった

【活動のねらい】育てていたカブトムシの幼虫が必ずしも成虫になれるわけではないことを知り、生き物の命やその変化について考える

【活動内容】サナギが亡くなっていたことを伝え、実際に姿を見せた。子どもたちが感じたことを受け止めながら、どうしてそうなったのかを話し合った

【用意した環境】飼育ケース・畑・園庭用シャベル

【子どもたちの様子】

- ・なぜ死んでしまったのか問いかけると、「土が重くて出てこれなかったのかも」「うまく脱げなかったのかな」「暑くてのがが渴いて死んじゃったのかな」等と、子どもたちなりに理由を考える姿が見られた。
- ・サナギの様子を観察しながら、「口のところに皮がかぶっているから息ができなかったのかも」と気づく子もいた。
- ・死んだサナギをどうするか問うと、「食べる？」という声があがった
- ・「土に埋めてまた生まれてきてね、みんなでお願いしよう、せーの」と一人が言うと、「お願いします」と皆で気持ちを込めていた。
- ・畑の日陰の土を選び、埋めることにした。



【保育者の振り返りと気づき】

- ・土の中の卵から幼虫が生まれてきた経験があったことから、「土に埋めたらまた生まれてくるのではないか」という発想につながったのではないかと感じた。また、生き物の死や枯れ葉が土にかえり植物の栄養になるという自然の循環について日頃から話していたことも、土に埋めるという考えに結びついたように思う。
- ・「食べる？」という言葉からは、生き物の死が別の命につながるという自然のつながりを思い浮かべていたのではないかと感じた。
- ・サナギの死を通して、子どもたちは土の状態や気温、水分など環境に目を向け、原因を考えようとしていた。虫を取り巻く環境への関心が広がった出来事となった。
- ・埋める場所に畑の日陰を選んだ姿からは、自分たちなりに考えたことを踏まえ、よりよい環境を選ぼうとする姿が見られた。



活動2：カブトムシの家作り

【活動のねらい】 育てているカブトムシのために家を作ることを通して、誰かのために何かを作る喜びや、作ったものを使ってもらえるワクワク感を味わう

【活動内容】 幼虫から育ててきたカブトムシの生態や好む環境について話し合いながら家作りを行い、完成後は実際にカブトムシを入れて動きや様子を観察した

【用意した環境】 加工しやすい柔らかめのお菓子の空き箱、トイレットペーパーやセロハンテープの芯、模造紙、折り紙、セロハンテープ、ハサミ等

【子どもたちの様子】

- ・「怪我をしないようにふかふかにしよう」「もぐって遊べるようにしたらどうかな」等と考え、紙を細かくちぎって柔らかい素材を敷き詰めていた
- ・「トンネルを通して、でこぼこ道を行って、ここを登って、滑り台でおりる」と、動きを具体的に想像しながら作っていた。
- ・「足で挟んで登れるから」と理由をもってセロハンテープの芯を選ぶなど、カブトムシの特徴を踏まえて素材を選択していた。
- ・カブトムシの動きを思い描きながら、「こう遊んでくれたらいいな」と願いを込めて作る姿や落ちて怪我をしないよう思いやる姿が見られた。
- ・実際に家に入れてみると、「そっちじゃないよ」「がんばれ」「ここはお布団だよ」等と声をかけながら動きを楽しみ、観察する中で段差を補強したり壁を作ったりと、さらに工夫を重ねていた。

【保育者の振り返りと気づき】

- ・これまで継続して観察してきた経験から、どのような場所を好むのか、どのような素材であればつかまりやすいのかを考え、素材選びにつなげている姿が見られた。
- ・登って楽しめる工夫をしながらも、落ちた時の安全を考えて柔らかい素材を敷き詰める姿から、相手を思いやる気持ちの育ちを感じた。
- ・友達の家にも順番に入れてみることで、友達の工夫に気づき、認めたり真似たりする姿へと繋がっていた。
- ・カブトムシに語りかける口調が自然と柔らかくなっており、生き物への親しみや、思いやる気持ちが育っていることを感じた。



活動3：カブトムシ・クワガタとのふれあい（カブクワ）

【活動のねらい】身近な生き物に親しみ、興味・関心を広げるとともに、思いやりの気持ちを育む

【活動内容】外部講師を招き、カブトムシやクワガタに触れたり、話を聞いたりしながら生き物の体のつくりや特徴について知る

【用意した環境】外部講師、カブトムシやクワガタ、絵本

【子どもたちの様子】

- ・「おしりをつんつんしたら動いた」「触れたよ」「持つことができたよ」「かわいいな」「ちょっと怖いから見るだけにする」「力が強いな」等と、感じたことを言葉にしながら関わっていた。
- ・初めは不安そうに見ていた子も、友達が触る様子を見たり、「こうやって持つんだよ」と持ち方のコツを教えてもらったりする中で、少しずつ近づき、自分なりのタイミングで関わろうとしていた。
- ・実際に持つことができた子は、手の中で動く様子や体の大きさ、形を確かめるように、じっくりと観察していた。

【保育者の振り返りと気づき】

- ・生き物に直接触れる体験を通して、子どもたちは喜びや驚きだけでなく、「怖い」「見るだけにする」といった気持ちも素直に言葉にしていた。一人一人が自分の気持ちに向き合いながら、自分なりの距離で関わろうとする姿が印象的であった。また、友だちが触る様子を見て安心したり、持ち方を教え合ったりする姿も見られ、生き物への興味や関心が子どもたち同士のやりとりの中で広がっていく様子を感じられた。
- ・一人一人の気持ちを大切にしながら、生き物との出会いを通して興味や思いやりの心が育まれていくよう、今後も丁寧に関わっていきたい。



活動4：木の中から虫が出てきたよ

【活動のねらい】身近な自然や生き物に興味をもち、探したり観察したりすることを楽しむ

【活動内容】射水坂公園で虫探しをする

【用意した環境】射水坂公園、枝、飼育ケース

【子どもたちの様子】

- ・木の皮の間から虫が出てくるのを見つけると、「他の木はどうかな」と枝を使って皮を剥がし始めた。繭のようなものを発見し、「何だろう」と興味をもってさらに剥がしてみるとクモが出てきた。虫の名前を知っている子が「ジョロウグモだよ」と友達に伝えていた。
- ・「こういうところにいるよ」と自分なりに見つけたポイントを伝えながら探す姿や、「虫が出てくるかもしれないね」と予想しながら関わっていた。

【保育者の振り返りと気づき】

- ・子どもの発見を大切にし、枝を持って一緒に探しながら「どうしてこんなところにいるのだろうね」と問いかけ、子どもたちの考えや気づきが広がるように関わった。友達の発見や保育者の関わりをきっかけに活動に加わる子もおり、環境や友達の姿に刺激を受けながら関りが広がっていく様子を感じられた。
- ・どのような虫が出てくるのか予想しながら観察する姿が見られたため、継続して観察できるように飼育ケースに入れて持ち帰った。しかし、持ち帰った後は興味の継続には至らなかった。
- ・子どもたちがより見通しをもって関わられるようにしたり、観察の視点を共有したりしながら、興味がさらに深まり継続していけるような環境づくりや援助を工夫していきたい。
- ・冬の自然の中にも子どもたちの興味や発見につながる環境が数多くあることを改めて感じた。季節に関わらず、身近な自然との出会いを大切にしていって視点を忘れずに関わっていきたい。

